

2005/2/12

研究発表

荒尾 稔

日本の白鳥群の餌付けによる影響と変動
そして今後、餌付けをどの様に位置付けるか

その前に昔の話し

- (1) 昭和34年頃の実態厚岸や尾岱沼での越冬群の南下傾向 尾岱沼が今の厚岸
- (2) 福島県いわき市での事例
- (3) 青森での死亡例の解析

日本の白鳥保護の原点である 白鳥の餌付けの歴史

- (1) 10年後 餌付け成功の話し
新潟の吉川繁治さん、そして青森の三上士郎さん
そのすばらしい功績と、長い経過の中で、餌付けによって、白鳥群が人を信頼し（あるいは徹底的に人間を利用して）慣れて、渡りの道添いに、餌付け文化が拡大。強い繁殖力で個体数増加 → さらに越冬地分散化
- (2) 20年後
伊豆沼で10,000羽と聞いて愕然、しかも雁が混じってそれも大きな群れに
- (3) 30年後
オオハクチョウと、コハクチョウの個体数が拮抗したと聞いてびっくり

白鳥の通り道（コリドー）の形成

- (1) 餌付けで渡りのルートが固定化した白鳥の個体群が発生
保護のための銃猟禁止区域設定 → 禁猟区化 → 保護区化 → 県の天然記念物 → ラムサール登録等
- (2) 民度の向上 → 生き物との交流経験 → 市民参画型社会の形成へ

餌付けによる現状をどの様に

大規模餌付け箇所に関する情報

- | | |
|----------------|------|
| 1 北海道厚岸 | 脱却 |
| 2 宮城県伊豆沼 | 脱却中 |
| 3 秋田県十文字町周辺 | 脱却中 |
| 4 山形県スワンパーク | 脱却中 |
| 5 福島県猪苗代湖 | 脱却中 |
| 6 福島県福島市親水公園 | 推進中 |
| 7 福島県いわき市夏井川周辺 | 脱却中 |
| 8 千葉県印旛郡本埜村 | 推進中 |
| 9 新潟県瓢湖周辺 | 脱却中 |
| 10 長野県梓川流域 | 今回観察 |

餌付けの影響度

- (1) 餌付けの影響をもろに感じる県
山形県／福島県／千葉県／長野県
- (2) かつて餌付けの影響が大きかったが脱却中
新潟県／秋田県／宮城県／北海道
- (3) 越冬個体が多いが、過剰な餌付けが存在しない
茨城県／滋賀県／鳥取県／島根県

取り組むべきルール化（私案）

<餌の与え方のルール化>

白鳥群に、埤としての安心と安全性を提供する
白鳥は格別頭の良い鳥で、人間を徹底的に利用している（別紙、楢葉の白鳥）しかし、同時に過剰な餌付けは、白鳥の生活文化を侵害する恐れがあり配慮が必要です。

- (1) ひとつの越冬地は、最大でも500~600羽を限度とする(それで餌の量を調節する) どちらでも、この個体数で、群れが分裂を生じる傾向。
1つの越冬地の個体数として、上限として考えてみたら如何でしょうか
- (2) 朝の餌付けを廃止、夕方も追加救餌とする(不足分の補充のみ)
餌付けから、救餌に変えていく第一歩であり、渡来地を罫場として考えさせる
餌場を探させ、それでも餌が不足であった個体に救餌をする考え方。
(吹雪、寒波等)
- (3) 白鳥群に、観光客から餌をもらうことを重視するか、自分で確実に餌を確保するかを
かを選ばせる。
- (4) 親子の白鳥は、特に毎日餌場へ飛ばせるように工夫する; 親子連れを重点に
(朝の餌断ちは、その一方法。お腹を減らした幼鳥にせつつかれて採餌行為へ)
- (5) その野生回復のために、採餌地として、ねぐら周辺域に、ふゆ・みず・たんぼ(冬
期湛水水田)などの存在が必要となります。

人と白鳥群の共生という観点から新たな関係を構築する

- (1) 人と白鳥群との共生関係を、再度見つめ直す。場所と安全と救餌をすることで、
それなりに働いて頂く
- (2) ふゆ・みず・たんぼでの有益な天然飼料供給者として
大量の糞を、天然グアノとして供給してもらう(グアノ、特にリン分の供給)
- (3) 白鳥のいる風景が、最善の景観保全となる
観光資源として、子ども達を含めた情操教育の場として、有意義
- (4) 水辺の鳥の生息環境を構築する
雁や鴨やサンカノゴイ、など貴重な水辺の鳥たちに、生態系の保全環境生成に貢献
- (5) 市民交流の場としての餌付け
都市の鴨への救餌(餌場がない、キンクロハジロでの事例など)
寒冷地での気温低下による救餌(厚岸)
乾田化の広がりすぎによる餌不足(本埜村)

人と共生する白鳥群

- (1) 宮城県では、北上川や、迫川にそった流域の大群、中群、小群で生息し至る所で
観察されます。県内に丁度10,000羽前後が、ここ15年変わりません。
小牛田や新田駅(伊豆沼観察拠点)など、駅のホームから間近に生活をしています。
れが、地域に溶け込んで、すばらしい景観をなしています。いま本格的な餌付けがさ
れている箇所は伊豆沼くらいでしょうか? 多くの場所では、餌は、時々観光客が与
える程度で、すでに餌付けから脱却した生活になっています。
でも野生状態では事故も多く、従ってぴたっと個体数増加も止まっているようです。
- (2) 新潟県でも、下越湖沼群の周辺だけで1万羽いると言われていています。しかし瓢湖の
個体群も餌付けは一部となり、罫(ねぐら)化しています。
田んぼに数百羽単位で舞い降りて、えさを漁っていますが、農家の方々も気にもしな
くなくなっている様です。半野生から、野生への段階を経ています
- (3) 人と、野生の生き物がお互いに無視し合って生活している。これが正に共生の真の
姿だと思えます。

餌付け個体と、琵琶湖や宍道湖、中海等での野生個体群との寿命の対比

- (1) 神谷様の論文 平均寿命が10年 経過的に個体数の増加が抑制されている
- (2) 宮城県 ここ15年間での個体数変動は過小(調査地点とのずれの指摘も)
- (3) 新潟県瓢湖 餌付けをやめた翌年の個体数が有意に減少。最近復活している
- (4) 餌付け白鳥の寿命は推測である
岩手県北上のクロちゃん 18年連続の繁殖。(最低20年以上) ことしも

白鳥群の種別展開

オオハクチョウ 沼や湖沼の鳥

コハクチョウ 田んぼの白鳥と呼ばれる

1960~1970年度は少数種 それから、あつという間の激増

新潟平野での、餌付けもあるが、大きな理由に田んぼの乾田化があります。